Voice ❺

from グアテマラ

ぼくたちは、なぜ学校へ行くのか

作家
石井 光太

国際協力において教育支援は大きな意味を持っており、各地でさまざまな事業が行われている。

教育によって学力を身に付ければ、輝くような未来を手に入れることができるかもしれない。奨学金を得て留学したり、専門職に就いたり、事業を起こしたりできる可能性もある。

だが、そこまで大きな成功を収められるのは、現実的には一部の人だけだろう。教育が競争である以上、子どもたちの中にも勝ち組と負け組が生まれてしまう。おそらく、それが分かっているからこそ、親も子どもも教育に大きな希望を見出せないでいるのではないか。

だが私は、教育にはもう少し小さな、でも重要な意味があると思っている。

昨年末に、中米のグアテマラに滞在した折、孤児や貧しい家庭の子どもたちを保護している施設をいくつか見学させてもらった。

グアテマラは中米諸国でも特に貧しい。地方となると、小学校にしっかりと通っている子どもは、半分もいないのではないかということだ。都市部にはストリートチルドレンの姿も散見される。そのほとんどが親のアルコール中毒、家庭内暴力、極度の貧困などによって家庭が崩壊し、家を飛び出した者たちだ。

地方都市で靴磨きをしている子に話を聞いた。9歳の少年だ。彼は父親が出稼ぎのためにアメリカへ密入国して8年間帰ってきておらず、顔さえ知らないということだった。最初の数年は仕送りがあったそうだが、3年ほど前からそれも途絶えて音信不通になっていた。

少年は学校には行かず、2人の兄と共に収穫の時期だけ農園で働き、その他は靴磨きや車洗いをして家計を支えていた。学校へ行けば教科書や文具代がかかってしまうため、通学を諦めているという。

私が話しかけた時、少年はこう言った。

「お父さんは、今仕事が忙しくて連絡をくれる時間がないだけで、たくさんお金を稼いでいるんだ。多分、来年には帰ってくるよ。そしたら僕は働かなくてもいいし、学校に行って友達とも遊べるようになるんだ」

この言葉が悲しく聞こえた。普通に考えれば、父親は出稼ぎ先で家庭を捨てて蒸発したのだろう。だが、息子はそう考えていない。きっと家族のためにがんばってくれているんだと思い込み、やがて訪れる幸せな生活を妄想しているのである。

彼に限らず、貧困に瀕する子どもたちが幸福を妄想して、過酷な現実を凌ごうとする姿はよく見られる。児童労働者、ストリートチルドレン、子ども兵。彼らはいつか誰かが助けてくれることを夢見て、苦しみや悲しみを紛らわせているのだ。だが、いくら架空の幸せを思い描いたところで、現実が変わることはないのは自明だ。

グアテマラの児童福祉施設のスタッフは、こんな子どもにこそ教育が大切だと言っていた。

「貧しい子どもは社会で自分がどういう状況にあって、どうすれば抜け出せるかが分かっていないのです。搾取されていることさえ分からないから、そこから脱しようとする考えもない。だから、つらい状況を一生受け入れなければならないんです。

私はこうした子どもにこそ学校へ行ってもらいたいと思っています。高学歴でなくとも、学ぶことで自分がどういう状況にあるのか、そしてそこから抜け出すにはどういう道があるのかを知ることができる。学校という場で先生や同級生と出会い、語ることに意味があるのです」

この言葉は貧困者にとっての教育の真髄をついていると思う。

教育を受けなければ、公用語も話せないし、論理的思考もできないし、自分が何をしたいのかを想像することさえできず、架空の幸せを妄想することしかできない。その妄想を子どもに植え付けてしまうのが貧困なのである。

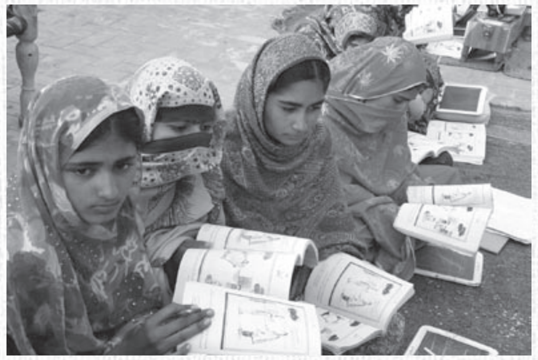
貧しい子どもは自分を取り巻く状況を、自らの力で変えていかなければならない。最終的には自分自身で打開していかなければならないのだ。だからこそ、学校の授業で教養を身に付け、先生や同級生と交わることで夢を抱き、未来を語ることが大切なのだ。その先に、初めて希望への第一歩がある。

グアテマラ西部のソロラという小さな町を訪れた時、白石みつよさんという日本人女性に会った。石畳の坂だらけの町で、彼女は現地の子どもたちの教育支援を行っていた。支援者から5000円ずつ集め、一年間学校へ行かせていたのだ。

こうした活動は今脚光を浴びるソーシャルビジネスのような華やかさはないし、注目されることも少ない。だが、白石さんのおかげで社会を知り、自分の足で歩き出せるようになった子はどれだけいることだろう。

国の未来は、子どもなしでは成り立たない。その子どもにとって何が必要なのか。海外へ目を向けようとする時、全ての前提となるその意味を、しっかりと考えてほしい。

学びの機会は子どもたちの未来を切り開く



“読み書きそろばん”は社会参加へのパスポートだ

学校教育のインフラが整備されていない国も多い

＜Profile＞
いしい・こうた
1977年、東京都出身。2005年、アジアの物乞いや障害者を描いた『物乞う仏陀』でデビュー。『神の棄てた裸体』『絶対貧困』『レンタルチャイルド』『地を這う祈り』『ノンフィクション新世紀』など著書多数。東日本大震災後に岩手県釜石市の遺体安置所を取材して執筆したルポルタージュ『遺体』は2013年に映画化。講演やラジオ、漫画原作など幅広いジャンルで活動中。